

エレナ・ファナイローヴァについて

鈴木正美

1. 詩人について Фанайлова Елена Николаевна

1962年12月19日、ヴォロネジで医者父と教師母の間に生まれた。1985年、ヴォロネジ大学（言語学専攻）とヴォロネジ医科大学を卒業。1985-92年、精神科の医師・研究者としてヴォロネジ州立病院に勤務した後、ジャーナリストとして活躍し、1995年からラジオ「自由」の通信員。1992年からヴォロネジ大学のジャーナリズム学科で広告心理学の講師もしている。詩人としては1974年に「ピオネールスカヤ・プラウダ」に作品が掲載されたのがはじめて、1980年代末から多くの文芸誌に詩を発表してきた。『旅』（1994）『独特なシニズムで』（2000）『トランシルヴァニアはわずらわす』（2000）の3冊の詩集がある。1999年度のアンドレイ・ベールイ賞を受賞し、現代詩を代表する女性詩人として高く評価されている。2003年、第1回モスコーフスキイ・スチョート賞を受賞。

2. 作品について

プリゴフ、ルビンシュテインの後で、詩は可能なのか。抒情詩、恋愛詩などすでにすべて使い古された言葉だけの陳腐なものになってしまったのではないだろうか。エロスから宇宙創生神話へと向かうヴェーラ・パーヴロヴァのように自己の身体と言葉を拡張する方法をとるか、あるいはコンセプチュアリズムの後衛として、すでに書かれてしまった死体＝言葉たちを弄ぶか、より思索を深めて形而上学的な哲学詩、宗教詩の世界に身を浸すか。長い詩的伝統、地層となったテキストたちを相手に、意識的に詩作をしながら、多くの詩人がいまも新たな詩的言語を生み出そうとしている。そうした状況の中でクーリツィンのWebサイトではEメールによる投票によって現代詩人ベストテンを決めるプロジェクトを行っている。詩人の条件は「1、生きてること。2、ロシア語で書いていることの2つのみ。」その結果は「アリオン」（2002年第2号）掲載のヤン・シェンクマンの評論によると次の通りである。1、セルゲイ・ガンドレフスキイ。2、チムール・キビーロフ。3、レフ・ローセフ。4、ドミトリイ・プリゴフ。5、エレナ・シュヴァルツ。6、レフ・ルビンシュテイン。7、ヴェーラ・パーヴロヴァ。8、ドミトリイ・ヴォデンニコフ。9、エレナ・ファナイローヴァ。10、シシ・ブリャンスキイ。妥当な結果のようである。

クーリツィンは「その知的な詩を通して、情熱的で、激しい、病的な」ファナイローヴァの作品を高く評価している。

年老いた緩慢な魂
肉体は棺から起き上がり
ガラスに唇がはりつく
そこで気づくのだ
それはいつでも他のものになりえたのだと

ファナイローヴァのメタファーはかなり複雑だ。それは詩人の内面的世界と通常の一般的な知識とをつなぐものではなく、先行する文学テキストや同時代の詩人たちとの対話的テキストを意識的に用いたもので、詩人の個人史や生活と深くつながっているために、しば

しば不可解な印象をもたらす。こうした詩の特徴を哲学者のセカツキイは「未熟ゆえの熟練した完成度」と形容している。「私が自分について伝えたいと渴望していることと私が自分について誰にも語らないこととの間にある潜在的な力の神秘的な相違、この内的世界の暗号より重要なものはない。言葉が詩になるのだとしたら、両者とも世界を提示するテキストのなかに存在する。最初に読まれた本の足跡は驚くほど堅固なものだが、さらに驚くべきことは記憶の思いがけない脱落、記憶と想像の高エネルギー発生装置なのだ。我々がお互い関心を持つのは、知識の共通部分ではなく、毎回繰り返されることのない模様を作り出す忘却の曲がりくねった海岸線なのだ。」

ファナイローヴァ作品の特徴の一つとして必ず指摘されるのが宗教的なモチーフと愛のテーマである。ヴェーラ・パーヴロヴァのように身体性やエロスを拡張するのではなく、恋愛という個人的な心理ドラマを一つの普遍的な症例のように展開することがある。「ロシアの愛の歌」から――

愛が生まれ、行い、行い、
手を取り、さまよい歩く、
たどりつき、絶望させ、絶望させる。

高いイラクサの上に殺されて横たわり、
愛はかよい、ぶつぶつ言い、不安にさせる、
あなたは目をあけ――あなたの前に立っている。

清らかな野に歌い、飛び、
黄金の大きにひびくのは何？
抱きしめ、別れ、さようならを言う。
かよい、うなり、うろうろする。

帰り、傷つけ、かき乱し、
泣き、よりかかって、おし黙る。

私のところに来ないで、私を待たないで、
一方的に私を見ないで。
私たちに誰も気づくことのないように。

ロシア詩においてはエピグラムという形で先行する詩作品との関係を意図的に示す伝統があり、このエピグラムだけのアンソロジーもあるほどだ。ファナイローヴァの場合ももとの専門分野である心理学関係のテキストからの引用や連想も多い。ユングの言葉をエピグラムに用いたり、フロイトの「文学的」著作を連想させる男女の心理的葛藤を描いたりといった作品である。例えば、「マリイ・Sへおくる詩」からの一部――

マリイは詩人Bの妻だった。
彼はといえば、某文学賞受賞者、

彼女は絞首台で語ることもできたろう、
しかし世界は皮肉に満ちている：Bは豪邸で
嬉々として欲望のテーマを展開し、
自分のことだけに集中した。
その奇妙な関係について語った、
すると精神異常者たちはいかがわしい文句を信じたのだ。
彼はゴルブノフだったり、ゴルチャコフになったり、
チャアダーエフにもなった。変幻自在。
おぼろげな記憶が残るだけ。
しかし、この半分も聞き取れない告白は
家来の不確定な債務を決定する：
アストラル体の結婚は寝室の壁の外。

マリイは詩人Bにもらわれた。
何ができるというのか？ 女王の矜持も
時も 彼女をかくまうことはできなかった。
提示された速度をうらみながら
彼は左の方へ彼女を寝かせた。
彼女の上に涙を落とし、掘り始めることを
彼は彼女に許さなかった、そう、神は正しい、
切り離された美しいゴルゴンの首
彼は彼女の血痕に口づけする——
楯もなく——でもあなたは
恐ろしいものを前にして震えることはなかったのか？
もしもそうなら、号泣し、嗚咽し、
栄光を踏みにじったのか？
ここには、ただ、彼女の嘲笑的な血。
彼は右の方へ彼女を寝かせた。

マリイたちは多くのものを欲した。
(所有していたのは少し)。ひどく扇情的である
(とBは書いた) 死刑執行なのに
刃のない幻想。彼らのこの死は
目を打つことはない。かん高い声がした。
女だから。(自分を優先した、
自分に傷を負わせ、網に落ちた。
自分を捏造した)。あなたがた。イギリスの王子たち、
死刑執行人を前にしてズボンの中にしたのか？

マリヤは権力のことはよく分からなかった。
(まず先に情熱) 皆が彼女を誘惑した。

興奮、君主のコンプレックス——その片鱗は
犠牲者のポーズで落ちていくことにも抗う
Bのもとに生まれた
何よりも皮肉な痙攣。
彼はロシアのジャンキーを研究し
阿呆な道楽者のように勝手に自分に結びつける
(後略)

しかし、ファナイローヴァはエピグラムの手法や引用のほのめかしだけではなく、あからさまに相手の名前をあげ、公開書簡のようなスタイルで書いた詩が多い。その相手はダシェフスキイ、ルビンシテイン、アナシェヴィチ、アイゼンベルグ、ヴォデンニコフ、キビーロフといったやはり詩人たちである。こうした詩人たちとの実際の対話、架空の対話、内的対話、相手の言葉やテキストの意識的な引用を自身の言葉と即興音楽のように交錯・同調させる独特のスタイルは、マイクロソフトのアウトルックのシステムを彷彿とさせる、と指摘している批評家もいる。同時代への詩人たちに対する愛情についてファナイローヴァ自身は次のように述べている。「実際のところ私は詩を愛しているし、手仕事や職業などで生を正当化することのない詩がなくては生きていけない。何ものにもとられることなく生きていけるなんて私には理解できない。私は詩人たちを愛している。彼らがみな例外なくアルコール依存症で、くだらない、信頼できない、ひどい人々だとしても。うつ状態、猜疑、躁病の発作と言葉の失禁による苦しみ。しかし彼らがいいのは、こうしたドライブ感、頭脳の嵐、サイケデリックなトリップ、生の別の形式が辞表を出すことの出来る純粹な方法を作り上げる力があるからである。」

生とはおそらく腐ることのないエゾイチゴ
傀儡たち、鳥たち、爬行動物たちに向かって
開かれた光の重みとしての胸

生とはおそらく理解されることのない園
手紙の中では思い起こす時間もない
この世のものならぬ冷たさのおまえへとすべては向かう

いったい詩人とはどんな存在なのか。なぜ人は詩を必要とするのか。そうした疑問を投げかけ、終わることなく答えを探し続ける詩人の姿がテキストから浮かび上がるようだ。

双生の神話。鍛冶場。
すべてから私を分離するな
群の中の白い雌羊のような
黒い父への現象

それらから私の目をそらさせるな、
野心家や嘘つきたち

魅惑的な空虚から、
死人やそのほかの
立派な嘘つきたちから。

愚かな雄犬や情熱的な狐のように
私はけっして変わらない、
しかし私に一般的な様式を授けてくれ
たとえどんな裏切り行為であろうと
Please

とどのつまり私にしるしを見せてくれ
うつけもののためのメッセージを私に送れ
娘っこや若僧たち
他の者たちより私の何が悪いというのか？
私と同じような精神異常者

自働選別
アルミニウム製の雪
みずおちあたりの青い光

作品リスト Фанайлова Елена Николаевна

詩集

Путешествие / Предисл. А. Драгомощенко. СПб.: «Северо-Запад»-«Митин Журнал», 1994. 36 с

С особым цинизмом / Предисл. А. Секацкого. М.: Новое литературное обозрение, 2000. 140 с. Серия "Премия Андрея Белого".

Трансильвания беспокоит. М.: ОГИ, 2002. 64 с. Поэтическая серия Клуба "Проект ОГИ"

雑誌・文集等掲載作品

«И аромат кофейных зерен,...». Митин журнал, вып.42. 1991.

Амальгама. Знамя, 1994. №12.

С нашей позиции. Знамя, 1996. № 1.

«Овидий разгребает снег в саду.» Арион. 1996. № 3.

Альбом Фриды. Комментарии. № 12. 1997.

Китайские простые пытки. Знамя, 1998. № 3.

С особым цинизмом. Стихи. Знамя, 2000. № 1.

Verses for Maria S. Crossing Centuries; The New Generation in Russian Poetry. Eds. by John High et al. Talisman House Publishers, Jersey City, New Jersey. 2000.

Из записок маньячки. Время "Ч"; Стихи о Чечне и не только. М.: Новое литературное обозрение, 2001.

TAEDIUM VITAE. / «Звезды русской провинции»; Стихи участников II Московского международного фестиваля поэтов. Уральская новь. 2001. № 11.

«Они опять за свой Афганистан». Стихи. Знамя, 2002. № 1.

«Они стоят с Аркашей словно два бомжа...». Критическая Масса, 2003. № 3.

書評・エッセイ等

Вместо путеводителя. [Эссе о Воронеже]. Митин Журнал, вып.51 (весна 1994).

Александра Петрова. Линия отрыва; День сегодня. Знамя, 1998. № 1.

Конец цитаты. (Александр Скидан. В повторном чтении.) Знамя, 1999. № 11.

Предисловие / Григорий Дашевский. Дума иван-чая; Стихи 1983-1999. М.: Новое литературное обозрение, 2001..

Рентгеновская метафизика (Речь при вручении Михаилу Гронасу Премии Андрея Белого за 2002 год в номинации «Поэзия») Новое литературное обозрение, № 62. 2003.

«Они опять за свой Афганистан». Новое литературное обозрение, № 62. 2003.

参考文献

А. Драгомощенко. Подкожная зима. Арион. 1996. № 3.

Л. Костюков. В точке миллениума. Дружба народов. 2001. №2

В.Шубинский. Кофий императрицы. Новый мир, 2001. №5
Н.Елисеев. Книжная полка Никита Елисеева. Новый мир, 2001. №11
О.Дарк. Ребро Фанайловой; Из цикла «Венок портретов современной русской поэзии». http://www.russ.ru/krug/20030630_od.html Дата публикации. 30 июня 2003.. (2004年3月1日参照)
鈴木正美「詩人たちと対話する詩——エレナ・ファナイローヴァ」ユリイカ 2003年10月号、青土社